

「ヤサネー」「ヨーシタヨシタ」。四日市市富田の富田小学校の体育館。全長約五尺の船形の山車を法被姿の児童が左右に揺らしながら、掛け声を合わせる。富田の鯨船。四日市市北部の富田地区に、江戸時代から伝わる伝統行事だ。

太鼓が響き渡る中、鯨船の山車が、児童が入った張りぼての鯨を追い掛ける。山車に乗って踊る一人の児童が木製の銚を投げて鯨を仕留めると、見学した保護者らから拍手が上がった。

富田の鯨船は大漁祈願と厄よけを兼ねて、昔の捕鯨の様子を再現した行事で、毎年八月に四日市市富田の鳥出神社に奉納される。豪華に装飾された船形の山車と竹で編んだ鯨が攻防を繰り広げる。一九九七年に国の重要無形民俗文化財に指定され、三年前には国連教育科学文化機関（ユネスコ）無形文化遺産にも登録された。

同校では、約二十年前から、地元の伝統行事を学ぼう



保護者らの前で披露する児童ら（これも四日市市の富田小で（同小提供）

四日市・富田小 鯨船行事

と、総合的な学習の授業で鯨船を取り上げている。社会科の授業で自分たちが住む地域の勉強をすることもあり、学ぶのは三年生。五、六月から鯨船が保存されている学校近くの倉庫を見学するなどして、鯨船に関する知識を深めていき、九月から二月月をかけて、鯨船に携わる地元住民らに週に一度、踊りや太鼓、掛け声などを教わる。

十月にはその成果を見てもらうため、授業参観の日に、クラスごとに発表する。児童は太鼓を演奏する役、鯨を演じる役、船を動かす役、船上で踊り、とどめの銚を放つ役などの各パートに分かれて、披露する。

児童の指導役の一人で、鯨船に長年携わっている館信夫さん（丸〇）は「子どもたちは覚えがよい。九月から十月までの週に一回ほどの練習で、太鼓や踊りなど、みるみる上達していく」と驚く。

昨年十月の発表会で、鯨船に立って踊った四年の館優利亜さん（丸〇）は「身体のバランスが難しく不安もあったが、本当に楽しく踊ることができた。地域の人が大切にしている行事を知れてよかった」と話す。一番前で船を動かす役を務めた四年の松岡将誠君（丸〇）は「船が重く、みんなで掛け声をそろえるのが難しかったが、一番大きい声を出すように頑張った。歴史ある行事を続けていく大切さが分かった」と振り返る。

発表会は保護者だけでなく、地元住民や近隣の幼稚園児も見学する。「たくさんの人がいて、緊張した」と踊り子を務めた四年の生川杏莉さん（丸〇）。それでも、本番を経て「今まであまり知らなかった鯨船の行事に興味が増えた」という。



運動場で練習する児童ら

富田小学校 1874（明治7）年、願入寺の道場を利用して授業を始めた。1887（明治20）年、現在地に校舎を新築し、「富田尋常小学校」として開校。生徒数705人（5月末現在）。米作りやたこ揚げ大会、防災訓練など地域行事の参加に力を入れている。

上浦健治校長は「人が動かし山車の上で踊るといふ信頼、重い山車をみんなで運ぶという協力関係の大切さは実際にやってみないと分からない。体感することで、地元の行事への興味や継承への意識が自然と湧いてくるのでは」と話す。

少子高齢化の影響で、鯨船に関わる人は少しずつ減っている。館信夫さんは「子どもたちには授業で習ったことを思い出し、実際の行事にも関心をもってもらえたら」と期待している。

今年は六月中旬に、鯨船の倉庫見学から活動を始める。楽しい授業の思い出とともに、伝統継承への思いが受け継がれていく。

（磯部愛）